

浄土

十二月号



法然上人鑽仰会

昭和十四年五月廿三日 三輪書店印刷
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授承務第第三五二号)
昭和四十三年十一月二十五日 印刷 昭和四十三年十二月一日 發行

第三十四卷

第十二号



さと

錦秋もすぎ、裸木悄然と立ち、霜大地をおおう師走十二月、暁の明星がきらめく八日朝まだきころ、仏陀は、割然とお悟りを開かれた。心ふるえる瞬時であった。

それは、生きとしいけるものにとって、暗夜にもしびを得たごとく、すべてに光のかがやけるを感得することであった。

さと、とはいかなる心地であらうか。

鉢には香る千家の飯、心に抱つ万乗の榮。これは、良寛の句であるが、かおっているのは、家々から供養をうけた一鉢の飯であるが、かれにとつては、負け惜しみでもなんでもなく、一鉢の飯が万乗の榮よりも、はるかに尊く感じられたのである。良寛の貧乏は、美しく清らかなものであったばかりでなく、尊いものであった。貧乏くさいみすばらしいものではなかった。そこにかがやきがあった。

一方をとり一方をすてるというのではなく、相対立をこえて、それは一つものであり、ただ一つのうちに妙があるとするのが、良寛のころである。いまおかれている境遇が、ありがたく尊く全生命のおかげを味う心地である。

—目 次—

表紙「冬木立」松壽達文画

もう一步北海道に旅して

.....岸 信宏… (2)

ご法語をいただく..... (7)

信は力なり

.....戸松 学英… (8)

仏とともに

.....山田 忠温… (10)

現代生活と宗教③

生きるための宗教の必要性…北村謙順… (12)

維新のころの人たち⑥

.....大橋 俊雄… (15)

明治仏教をになった人々②..... (18)

にくしみと和

.....長谷川 満… (21)

願 う

.....清川 宗治… (24)

新刊紹介「心といのち」..... (26)

現代宗教論③ 教育と家庭

.....竹中 信常… (28)

編集後記..... (32)

法 然 上 人 御 法 語

虚仮とて、かざる心にて申念仏が住生はせぬなり。決定往生せんとおもはば、かざる心なくして、まことの心にて申べし。



もう一步

北海道に旅して

岸 信 宏

昭和四十三年六月二十五日、開道百年記念浄土宗大会を札幌の新善光寺で盛大に親修することのできました私共は、さらに六月二十八日に釧路の大成寺に於て開かれることとなった開道百年の記念大会に出席のため、札幌発午前八時四十五分の特急釧路行大空号にのりました。この列車は函館発であります。青函連絡船がおくれた為に、札幌へ三十分おくれてつきました。途中のおくれをとりもどしながら、釧路へは定刻近く午後二時五十分につきました。

釧路駅には市内の浄土宗寺院、總代等多数の出迎えを受け、阿寒から前田様も自家用車で出迎えて下さいました。この機会に阿寒湖畔の前田家を訪問することとなり、多年の宿願が果たされますことは、私にとってこの上もない喜びであ

ります。

釧路は濃霧のよくなる漁港とのことで、今日も霧が濃くかかっています。釧路から阿寒までの道路は立派に舗装せられていきます。前田家の自動車で阿寒に向いました。約一時間ほどで阿寒の山なみに続く山林地帯につきますと、路傍に「前田一步園所有林」と書いた大きい標木が立っています。霧は全く晴れて夕日が山の間に輝いていました。五時半頃、前田家につきました。

玄関の入口には「一步荘」という表札がかかっています。玄関をはいった庭の壁に、武者小路実篤氏が光子様の主人前田正次様に贈られた「一步」ということをよまれた、次のような詩が掛けられています。一步とは先代正名翁の雅号で

あります。

いかなる時にも自分は思う

もう一步

今が一番大事な時だ

もう一步

家はすべて前田家所有林から伐り出した材木を使ってある
とのことで、堅牢にして瀟洒、設備の行き届いた豪華なる建
築であります。応接間は洋風になっています。ここから芝生
の庭を通して阿寒湖の一部が見え、雌阿寒岳と雄阿寒岳の中
間にそびえる、ふつぶし岳（アイヌ語）が湖面に影を落して
います。

うつくしき山影うつす湖のかなたに夕日沈みゆくなり

玄関先の広い庭には前田家の山林から、代表的な種々の木
や高山植物の草花が集められてあります。松にもえぞ松・と
ど松・落葉松の三種があります。おんこ（一位の木）エルム
（にれの木）の木も珍らしく、ライラックの花はうす紫に咲
き、岩つつじが真紅に咲いていました。和風のお座敷の窓ぎ
わには、ぼくしやという草花がピンク色の花をつけて三鉢な
らべられてありました。光子様の好きな花とのことです。熱
帯性のものです。

窓ぎわにぼくしやの花はうつむきて色うつくしく

しずもりてさく

お風呂は温泉で、すみきった美しい湯が流れています。阿
寒の温泉街の泉源は前田家の所有であるとのことだす。

すき通る出湯におのが心をも見らるるおもう一步山荘
山菜を主にした珍しい品々の夕食を頂いてから、阿寒の
夜の町を光子様が案内して下さいました。観光のシーズンの
ため、町は学生などの旅行者で賑わっています。土地は前田
家の所有であるため、土産物や、旅館やバー等があります
が、あまり俗化しないことを条件にして貸してあるそうで
す。

町のはずれにアイヌ部落があります。土産物の木細工を作
っている店が多いです。また會長や乙女達がアイヌの踊りを
見物せしめる小舎がありますが、今夜は特に前田様の依頼で
町の広場で踊りを見せてくれました。會長は一人で劍の舞を
踊り、乙女達は鶴の舞を踊ってくれました。

夜の広場アイヌ乙女と會長は鶴と劍の舞をおどれり

翌二十七日、朝九時から光子様の案内で、御主人正次氏のお墓を新たに建てられた正徳寺へ参詣して、墓前で御廻願をしました。寺は曹洞宗の尼僧寺院で、本堂は前田家の東京の菩提所である芝山内妙定院の本堂に模して、前田家が新しく改築せられたのです。本尊は薬師三尊であります。

次いで前田家が建築して町に寄附せられた福祉センターを
観せてもらいました。種々の会合に使われているとのことだ
す。階上には知恩院山門の横にある、前田正名翁の記念碑を
拓本にして持ち帰り、それをアイヌの木彫の名工藤戸竹善氏
に、おんこの大木に彫刻せしめられたのが飾られてありまし
た。正名翁の記念碑に彫刻せられている人物は、富岡鉄斎画
伯の描く正名翁の肖像であります。先年光子様が主人の遺志
によって、所蔵せられてあった鉄斎画伯の軸物を三十点余り
知恩院へ寄進せられたのであります。その中にこの肖像によ
く似た肖像画が一幅あります。それには鉄斎画伯の自賛があ
りまして、「獅子独行」と大きく書き、その傍らに正名翁の
渡欧を送るといふ意味の賛が書き加えられてあるのです。

次に前田家が経営していられる製作所を見学しました。前
田家の事業は光子様の甥夫妻が同家に住みこんですべての経
営を管理していられるのです。光子様は今五十六歳ですが、
お子様が無いので六十歳の還暦を迎えられたら、全財産を財
団法人にせられるそうです。その話は私も直接に聞いたところ
であります。北海道新聞も七月七日の紙上に、「阿寒に
かける夢」として、阿寒に永住を決意せられた前田光子さん
の還暦以後の仕事の抱負を詳しくのせているのであります。

次に前田家の遊覧船で阿寒の湖上を案内してもらいまし

た。船中でお抹茶を頂きました。湖岸の原始林の間には今、
山つつじが咲き終り、これから石楠木（しゃくなぎ）が咲き
出すとのことでしたが、湖水の景観の見事なのは秋だそうで
す。紺碧の湖水にうつる真紅の紅葉の美しさであります。阿
寒湖はまりもの棲息地で有名であります。その棲息地へ遊覧
船のはいることは禁ぜられてあります。

湖中には大きい島が四つと、湖尻に小さい島が十九ありま
す。大きい島の中の大島というのに小さい池と作り、そこに
まりもを少し移して遊覧船の人に見せています。湖と遊覧の
コースはこの大島に上陸して、まりもを見るのが中心となっ
ています。私共も大島に上陸して、特に番をしている人から
まりもを手網ですくいあげて見せてもらいました。湖尻にあ
る小さい島々の景観も見えて引き返し、普通の乗船場でない所
に船がつけられて上陸したのであります。そこから原始林の
中を通って前田家の裏口へ出られるのです。先年、陛下が阿
寒へ行幸の節にもここに上陸せられ、原始林の中にはえてい
る、しだ類を興味深く観察せられたそうです。

前田家に帰りますと、釧路の大成寺や浄土寺の総代の人達
五名が出迎えに来ていました。湖の見える庭の芝生の小
亭で、出迎えの人々と昼食を共にしました。ここで焼きなが
ら頂いたとうもろこしの味は又格別でした。去年産の冷凍も

のだそうですが、その粒の大きさと、みずみずしき、あまさは今とれたばかりのような感じでした。

午後一時、出迎えの人々と共に、自動車三台をつらねて釧路へ向ったのでありますが、途中、摩周湖を見物することとなりました。道は山間をぬって走る観光道路で、今道幅をひろげる改修がところどころに行われていました。



望双岳展望台という所からは阿寒湖の一部と雄阿寒、雌阿寒の両岳を遠く望むことができました。又清水の沢という所があり、山腹から清らかな水が流れ落ちていのです。ここを通る観光客は車をと

どめて、この清水を口にし、旅情をなぐさめるのであります。

やがて弟子屈（でしかが）の町に出て、そこから摩周湖に向います。第一展望台につきますと、そこには観光バスが幾台も停車し、観光の人々で賑わっています。湖は周囲が断崖でかこまれ湖辺に降りることができません。高い所にある展望台から眼下に湖を眺めるのです。湖岸から屹立している旧火山が不気味な姿でそびえています。湖のまん中に小さい島が一つ浮んでいるのが頗る印象的であります。この湖の深さは世界的にも有名であるそうです。今日のように展望のきく日は少いとのこと。神秘の湖水といわれています。第二、第三の展望台もあるとのことですが、時間の都合もありますので、第一展望台から引き返して、一路釧路に向いました。弟子屈の町を離れると、やがて広漠たる根釧（こんせん）原野に出ます。

一面の湿地帯で、雑草のみおい茂っています。その中に一直線の道が堤防のように造られてあります。湿地帯の利用、開発がいろいろ試みられているようですが、まだこれという成果があがらぬそうです。冬季には丹頂鶴が群をなしてシベリア方面から飛来して越冬することです。この原野を離れると釧路の市街に入ります。

同行の前田光子様は市内にある熱帯植物園に案内して下さる。温室の中には光子様の好きなほくしゃの花が色とりどりに咲いています。その中でピンク色のもの数鉢を注文し、京都へ持って帰れるよう荷送りをさせて下さる。

五時過ぎ、富士屋ホテルに入る。この旅館は光子様の御主人正次様が常宿として、特別の一室を前田家がこしらえてあったそうですが、今は経営者も代り、その室も改造せられてしまったとのことです。しかし通された二階の室には平福百穂の孔雀の絵が床にかけられ、中村不折の「安分之心養福」という句や、大谷句仙師の「煙霞隣」という句の額が掲げられています。明治生れの私共には懐しい文人の画や書であります。室の隅には六月の末というのに、まだストーブがゆるくではあるがたかれて、葉罐がのせられてあります。さいはての北海の地に來た感じであります。前田様の常宿はいま別のところであり、その方へ行かれました。

六月二十八日。午前九時、大成寺へおもむき、同寺経営の幼稚園で児童の歓迎の辞を受けて挨拶をしました。それから近くの浄土寺へ立ちよりました。最近に本堂が新築せられ、内陣の丸柱等はおんこの木（一位の木）で前田家の山林から伐り出して寄進せられたものだそうです。大成寺へ帰って、開道百年の記念法要と剃度式とを行いました。前田様は浄土

寺へも、大成寺へも参詣せられ、剃度も受けられました。受者は二百五十名程ありました。関係者一同、八浪（やつなみ）という立派な旅館で夕食を共にしました。夜に入って霧がこくなりました。

霧の町港も見えず時々汽笛の音のきこゆる釧路

午後九時二十分釧路発特急札幌行まりも号に乗り、夜行の寝台車で、翌二十九日、朝六時四十分札幌につきました。新善光寺にて午前中休憩させて頂き、午後支笏（しこつ）湖に案内してもらい、その絶景を賞しました。北海道唯一の不凍湖であるとのことです。午後四時五十分千歳空港発の大阪へ直行のゆうかり号にのり、二時間余で大阪空港へは六時三十五分につきました。本山からの迎えの自動車にて八時前に無事帰山いたしました。

このたび北海道に旅し、開道百年の札幌大会と釧路大会とを親修し、阿寒畔湖の前田家へ立ちよる機会を得たのでありますが、同家の玄関に見ました武者小路実篤氏の「もう一歩」という詩の言葉が深く私の心に残っています。それは私共人生の指針であると共に、著るしい発展をとげている開道百年を迎えた北海道についても言えるのではないのでしょうか。

ご法語をいたただく

虚仮とし、かざる心にて申念仏が往生はせぬなり。決定往生せんとおもはば、かざる心なくして、まことの心にて申すべし。

(勸修御伝 第二十)

河内国に天野の四郎という盗人の張本人がいて、相手をかまわず財産を強奪し、時には平気で人を殺すという悪人がいました。ところが後になって、法然上人のお弟子となり、教阿弥陀仏と改名しました。

やがて教阿は京を去って、相模国河村に住む知人の許に身を寄せることになりました。教阿は生きて再び上人のお目にかかることがないと思い、「ただ詮をとりて、決定往生仕ぬべき御一言をうけ給はりて、生涯の御かたみにそなへ侍らん」と、上人に向って最後の御教諭を下さるようにお願ひしました。

法然上人はまず最初に、

「まず念仏には甚深の義といふことなし。念仏申ものは、かならず往生するとしるばかり

也」

といわれました。義は意味ということで、

教理ということです。お念仏を唱えれば、必ず往生できるということを信するだけで、これ以外に特別な教義というものがありません。このように浄土門の修行は易しいことなのであって、お念仏を唱える人の数も多いのですが、それでいて全部が全部往生できるとは限っていません。何故かといえは、虚仮となつて、お念仏を唱えるのに人前を飾る気持があつて、真実のお念仏を唱えることが難しいからであります。この点真実の心でお念仏を申すことは三心の至誠心があつて、この心が欠けていてはなりません。

しかし人前を飾らないということは、実は非常に難しいことであつて、法然上人は次のように述べられました。

「朋同行はいふにをよばず、その外つねになれ見る、妻子眷属なれども、東西を并ふる程の者になりぬれば、それがために、かならずかざる心はおこるなり。人の中にすまんに、その心なき凡夫はあるべからず」

人は独りで暮すわけではないので、人前を

飾り、他人を意識する気持をなくすることができません。そこで上人は言葉が続け、教阿に教えられました。

「まことの心にて念仏すべきといふに、つねに人にまじりて、しづまる心もなく、かざる心もあらんものは、夜さしふけて、見る人もなく、聞人もなからん時、しのびやかに起居て、百遍にても千遍にても、多少ころにまかせて申さん念仏のみぞ、かざる心もなければ、仏意に相應して、決定往生はとぐべき。この心を得なばかならずしも夜にはかざるべからず。朝にても昼にても暮にても、人のききはばかりなからん所にて、つねにかくのごとく申べし」

このお言葉は、相手が元強盗の教阿であるから申されたものではありません。実は法然上人ご自身ですら、夜半に起きられて、静かにお念仏を唱えることがあつたのです。教阿は上人のお教えをいただいて、今更のように人前を飾らない気持でお念仏を申すことの難かしさを思い知らされました。

(村瀬秀雄)



戸 松 学 瑛

(一)

朝鮮・満州・支那方面の慰問布教の途次、日露戦後に難攻不落の旅順を訪れ、二〇三高地を下り広場に立つ。そこには日露戦役記念の品々が展観されており、いずれも血染の品々、ドス黒いものばかり、その中に数百枚の古銭、穴あき銭、ビタ銭が飾られてあった。傍らの説明書——これは日露戦役に日本兵戦死の遺骸の下から掘り出したものであります云々と。

これはかつて乃木將軍が長官であった、四国善通寺の兵士が多く戦死されたと思われる場所から、掘り出した血染の六道銭であるという。

私は合掌念仏、ここを久しくたやすくは立ち去りがたき次第であった。

「戦争とビタ銭」トッピな対象です。だが我国では、古来行なわれている習慣で、昔は死者の棺中へ六道銭を持たせたのです。これによって亡者は通行を許され、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の迷いの境界を無事通行して、安住の世界に入ることができるという（サイの河原の物語）のであります。

四国の善通寺は弘法大師御因縁の霊地、また將軍有縁の兵団で、そこから応召された勇士、この勇士は寝物語りにもビタ銭の哀話に耳を澄ませたことであろう。

後の世もこの世も共に南ムアマミダ仏まかせの身こそ安かれ

念仏申せば後生は助かるの確い信仰を身に体して応召、出征されたる勇士、やがて困難に殉じて、身は安養浄土に大往生を遂げられたることであろう。血染のビタ銭、正に金瑤に勝るとや申そう。

六道銭や賽の河原の物語りは、まことに幼稚なお伽話のような宗教物語りであります。が、今も尚、その根跡は印度に存し、王舎城・祇園精舎・竹林精舎等の遺跡と共に伝えら



信は力なり

れ、ほとりを流れる賽の河の水は力なく流れております。

そのまわりには、観音・地藏の諸ぼさつにもまごう岩石立ちならんで、救いの手をのばしておられる。經に曰く

光明遍ねく十方の世界を照らして

念仏の衆生を摂取して捨てたまわず

仏法の大海、信を以って能入となすとか、旅順の勇士、永々に安かれ。

(二)

帝政ロシヤ革命の初め、白系露人が続々逃げこんだハルピンへ、丁度私は宗命を帯び、邦人慰安赤十字慰問の目的で到着しました。

ある橋のたもとで私を呼び止めた一邦人、大和撫子某

お願いがございます。私は山口県人、故あって故郷を離れて此処に参りました。生きて故郷にかえられる身ではございません。いずれは松の木の肥料となる身、願わくは臨終一片のお経の声が聞きたい、それについてあなた様御本山へお帰りの上は、どんなお小僧さんでも、是非この地にお寄せ下さいますよう、決して御不自由はさせませぬ。

と、一生懸命の申し出。事の如何は別としても、仏性開発の心がけには深く喜びを感じずにはいられませんでした。

山川草木悉有仏性の道理を如何に実行に移しつつありやなしや。

石中に火あり打たずんば出でず

人中に仏性あり修せずんばあらわれず

努めよや、努めよや。



仏 と と も に

○ 宗教の極致は神人合一とか、仏凡一体とかという言葉で表現されますように、人間が神と結びつき、仏とともに生きのびることです。西国巡礼の行者が、その萱笠に同行二人と書きつけるきまりがあるといいますが、そこには、たのみ観音さまがつきそっていただくという感覚をあらわしたきまりであります。

仏とともに日ぐらしをする、という心もちが、うるわしく培われ、みがきあげられておれば、むずかしい理屈をこねまわしたり、窮屈な気持を、あれこれといわなくとも、宗教生活はおのずから成就されるのであります。

明るい生活、みちたりた生活、力づよい生き方、生き甲斐のある法悦がひとりて華びらき、実を結ぶことになりました。

ところが、胸に手をあててつらつら思い案んずるに、仏とともに生きるということ、仏と二人づれの日ぐらしをするということ、仏に親しむということも、容易なわざではありません。朝な夕な仏さまにおまいりしているときでさえ、心のありかたをふりかえってみますと、いつのまにか、仏に背をむけて、仏から逃げ出そうとしているのが、わたしたちのあさましい姿ではないでしょうか。

仏とともに、といううるわしい欣求のおもいのあらわれることも事実ですが、仏とともに

に生きぬけないことも、また事実であります。わたしたちは、このいたましい分裂と矛盾になやみぬいた経験を、だれびとももっておられることとおもいます。

この矛盾のおこることには、いろいろの事情もありましようが、端的にもうしますと、わたしたちの現身そのものが悲しい障りとなつていふことであります。

わたしたちの原始の生活は、動物と同じ行為をしていたものでしょう。それが生活の開発とともに高められて、理性のちからが織りこまれたとき、知恵がめざめ、道徳がきずかれてきました。さらに、神に折り、仏をおがんで、向上しようとするのが宗教人の生きか

たであります。

ところが、この高い理想にみちびかれるとき、低い現実のしがらみが意識してまいります。仏を慕うるわしい心象が、動物につながる肉体というだけでなく、動物とおなじ肉体を媒介として生きなくてはならない、業報に仏と一致しきれない障りが厳存していることであります。むさほり、いかり、おろかさの三毒の煩惱にまどわされながら、動物的本能にひきづられてゆく生活意欲にはかなりません。けだかい聖なるものに結合するには苦痛すら感ずるあわれな現身です。

この現身に、しかるべき制約をくわえて、聖化のいとなみを工夫したことは久しいものですが、それはついに実現されない空像にすぎないことが気づかれました。

独歩が

「祈りの文句はみじかけれども、祈りの心はえがたし、かたし」

と悲泣したことは、人間の淋しい限界を誠実にみとつけた歎きであります。

されば、仏とともに、という理念は永久に

実現されないものでありましょうか。仏に一致することのできない人間の障礙をみとけて行きづまった、わたしたちも、ありがたいたくことは、こうしたあわれな地上の分裂と人間の矛盾を傍観しておられないところに、仏のまことのすがたをみることであります。

そこには、人間に一致を求めたもう仏の本願が、ありがたく開顯されていたのです。

人間が仏に一致をもとめる小路は閉ざされても、仏が人間に一致したもう大道がひらかれていることであります。

法然上人のひらかれた浄土のおしえは、まさに、この大道を顯示されたのであります。

人間は、つねに仏に背を向けておりますが、人間が背を向けたときでも、仏は背を向けずに、いな、むしろ背を向けるような人間であればあるほど、仏はうちすてておかずに、摂めとつて捨てたまわないのであります。人間の背反をそのまま高次的に統攝するところに、まことの仏心があらわれているのであります。

仏心とは大慈悲これなり、無縁の慈をもつて、諸の衆生を摂したまう。

と、無縁の聖愛は、あらゆる分裂とあらゆる背反を高次的におさめとられたすがたであります。

わたしたちは、ふるさとを石をもつておわれた、追放のさすらい人になたえることができましよう。あらゆる門戸は閉ざされております。すべてから拒否され、よるべなくさまよう悲しいさすらい人であります。このいたましいさすらい人待ちうけているのは、ただ浄土だけであります。

浄土の莊嚴は、真善美聖のかぎりをつくしてありますが、とりわけて聖なる莊嚴は、このさすらい人をまちわびて、いつまでもひらいている浄土の門です。罪障ふかき、わたしたちをまちわびて、みちびきいれたまうのはこの浄土の門だけであります。

大空の月をはらみぬ草の露

十五夜の月は、わたしたちの手のとどこない大空にすみわたっています。そして、そのまま、わたしたちの脚下の草の露の中に宿っているのです。

超越したもう仏のちからは、そのまま内在して人生をすくいたまうのであります。

現代生活と宗教

第三回

生きるための

宗教の必要性



北 村 謙 順

●
「人生わずか五十年」。数百年にわたって言われて来たわれわれの人生が、戦後の二十数年にして二十年も長くなった。「人生七十古来稀なり」ということだったものが、あたり前に考えられるようになったのだから、まことに結構な祝福すべき現代とも言える。

これは、もとより医学の進歩、保健衛生の向上、衣食住にわたる恩恵など、数々の条件が整って来た現代生活の姿であると申せましよう。

ところが、それがまた手離して喜んでもいられない問題を生むことになるのだから、その事は、万事すべて思うようにならないものである。うれしいはずのことが、悲しみの因になるのだから、人の世はいつもままならぬものである。

つまり、昔からの物事は、人生僅かに五十年ということ基準にして、家庭生活や社会生活を律して来たとみてよろしい。それは、人間まず五十を越えたら老人で、社会からも退役して、隠居の身分になって、息子に養っ

てもらおう、という在り方で、それが尋常の場合、当然の姿であったと見てよろしい。ところが、今日、五十を越してみても、本人自身、老人とはどうみても思われないうし、第一そんなことを言ってもおられない。仕事にしても、むしろ油ののりきった年代で、引退などする年ではないということになって来た。

それに、現代は核家族化現象で、自分が動ける限りは働かないと、自分達が生きる生活の糧にも窮することになって来た。

現代の老人の生活には、過去の人々が殆ど夢想しなかった、別の形で解決をはからなければならぬ複雑な問題が登上して来ていると考えられる。

戦前の老人ならば、人生の荒海の中で生計を立て、子供を辛苦養育して来た功勞者として敬われ、余生は仲や孫どもに取りかこまれて安楽に暮すことが願ひだったし、先ずはそのように過すことが普通の場合出来たわけである。

けれども、現代の老人の何%が、このような姿で生きているのだろうか、主に地方の農

村などにその形が見られやすく考えられるが、日本の産業構造の変化の波は、今日、どこへも押しよせて来ている。息子は勤めにいき、嫁は工場に出る、家にのこるのが老人である。孫の子守りで日向はこは昔の話である。男は田圃で働き農地を守り、女は台所を引受ける。伴どもが帰る頃には夕食も出来ていれば風呂もわいている、ということになる。

老若の主客が、いつの間にか顛倒したような姿が出てきている。更に息子達は出稼ぎ、あるいはつとめの関係で都市生活となり、老人のみわが家を引受ける。そして、タテの家族関係が、ヨコの関係に比重が移った現代、民主主義のはきそこないも加って、老人が、若い人から見離されて行こうとする現代。老人の胸中には新たな苦悶が次々と生じてたえない現代である。老人になったら偉ばって楽をしたいと思つて、あくせくと生き続けて来た現代の老人達にとって、待つていたものは、働くことと、孤独と、であろうか。

ここで四十三年五月、文部省で出した「第三の人生」という本の中で「老人の生活の要十訓」というのを参考までに申し上げてみると

- 一、過ぎたことで心を煩わさないこと
- 二、いちばん愉しいことは他人を愉しませることだと知ること
- 三、自分の信条や考えをおしつけないこと
- 四、自分に応じたペースを守ること
- 五、十分睡眠をとること
- 六、適度の運動をすること
- 七、食事は規則的に、おかずを豊富に、野菜、果物、海藻類をまんべんなくとること
- 八、歯はきちんと手入れをしておくこと
- 九、便通をよくすること
- 十、自分の身体をよく知っている医師をつくっておくこと

であります。

さて、第一番目であるし、特に目につくのが、過ぎたことで心を煩わさないこと、と、出ていること。つまりこれは、現代の中に生

活する老人としての自覚をもつことの必要性を示したものだと思われまふ。過去の觀念を追つても悩みを増すばかりで、何の解決も出てこないということ。むしろ現代に生活する者として、老人もまた、自らが生きる自覚をもつという心の構え、姿勢の必要性でありまふ。自尊が自灯明、法灯明、と示されたお言葉が改めて印象ぶかく浮んでまいります。

それから、老人は老人の仲間があります。

その仲間同士が協力することがとても大事だと思ひます。一番よく理解し合うことの出来るお互ですから、いたわり合うことによつて苦しみも、淋しさも、空しさも、孤独感も、のり越えて行く姿が、必要になつて来ていると思うのです。現在、全国に、老人クラブの組織が出来ていますが、それは悪口の製造所や、仲間げんかの会ではなくて、お互に共に明るく生きて行くための大事な機能を示さなければいけないと思われまふ。今までとちがつた新しい意味での仲間づくりです。

身体が不自由でねたきりの不遇な老人のために、身体の丈夫な老人達が、リヤカーを仕

立てまして、この人を乗せまして、晴れた青空の下、方々を連れて歩いて、見物をさせた話を聞きましたが、自分達がお互に助け合い話し合い、前向きで生きる智慧をつかまえて生きていくとする尊い姿を知ることが出来ます。

◎

そこで、現代に生きる老人は、自分の信仰を持つことが、益々必要な時代となって来ました。それは形式の宗教や慣例の宗教や気なぐさめのように見えた宗教ではなしに、そこからもう一つ進んで、自分の宗教、自分が生きるための宗教が必要だということでありま

す。社会保障が進み、養老院に入れば不自由なく暮せるはずの北欧の国で、老人の自殺が多いと聞きます。これは、孤独にたえられない人々が多いことを如実に証明しています。

人はパンのみにて生きるものにあらず。どうしても物心両面の支えが必要になって参ります。物の支えや生活の保障は、国で何とかしてくれたいとしても、心の支えが無いとした

ら、その人の人生は砂をかむ思いの人生です。

生きていくハリのない人生となります。そのハリを何とか見つけ出さないと、これから老人の長くなっていく人生は寂寞の限りです。その支えは、自分でつかまえる他に方法がないという点でむずかしさがあります。然し、どうしても見つけ出して行かねば、明るい老人の人生は出てこないという所に立っているのが、現代及びこれからの老人の立場のように思われますが如何でしょう。

自分の人生を生きようとする自覚をもつ程の人であるならば、自分の精神の、自分の魂の支えとして生きるための宗教をもつことが出来ると思ひます。

私の知っている人で、明るく活動して下さる老人があります。「私は毎日が楽しくてしようがない」と言われます。「家業は伴達がやるから私は経営については重荷を下している。これから本当に自分のことを存分にやる事が出来るのです。その自分のこととは信

仰です」と。喜んで法話をきき、これをメモにとります。私共が差上げた仏教の本を何遍でもよみ返す。それを又、メモする。自分の魂の糧にしようとする努力です。お念仏を申すことが楽しいのですとよく申されます。私は年をとるのを厭だとも思いません。益々大きな楽しみが開かれて来るように思うからです。これは他からの楽しみではありません。信仰によってのみ得られる喜びでありましょう。それがこの人の姿の上に、喜んで生きる大きなハタラキとなっておるのです。

現代生活と宗教という課題に対して、老人との関係を探ねてみました。然しそれは老人のみならず、すべての人がやがて老人になることです。すなわち、全体の問題として、切実な、宗教との関係があることに気付かしめられます。それと同時に、老人と宗教の問題は、現代生活に光を当ててみることに、新たな意味をもって改めて真剣に、宗教家も考えねばならない緊要な事であると信じます。



維新のころの人たち

— その六 —



大橋 俊雄

西三河には、今においてさえ律風がただよっている。それは徳巖が中山貞照院に住し、伊賀に昌光律寺を開いて、大乗律苑としたことによるのであるが、捨世派の徳本行者も三河に来、その最もすぐれた弟子の一人であった徳住は荒井山に九品院を建てて、捨世の風儀を高揚した。こうして浄土宗に清風をおくりこもうとする浄土律とか、捨世派という流れは、三河においていやが上にも高まっていったのである。

三河の農村には「一に幡秀、二に慧頓、三つ四つがのうて、五に徳住」という俗謡が伝えられている。幡秀は西山派

の僧で棚尾妙福寺の一代であり、慧頓は中山貞照院、徳住は荒井山に住し、ともに高德の僧として多くの人たちの信仰をあつめた徳僧であったが、慧頓の弟子に湛忍という僧がいた。湛忍は伊藤・伏原と肩をならべるほどの名古屋の素封家岡谷惣助宗純の長子として生まれた。普通ならば、当然家督をつぐべき身であったけれども、不幸にして生れながら鼻が低かった。そのため家業をつぐということは、伊藤などの手前ていさいが悪い。また幼いころ大患いしたことがあった。父母の歎きと悲しみは、ひと通りでなく、信濃の善光寺にお祈

りして、「若し、この子が万一回復することができましたら、その時にはかならず出家させ、仏恩を報じさせていただきます」と願われた。これが仏縁となり、阿弥陀如来との約束によって、貞照院の慧頓上人の門をたたき出家したのは、十二歳の時であったという。

出家してからというもの、湛忍は熱心に修行をつむかたわら、近隣の子供たちを集めては俳句をつくるのを楽しんでいたが、中に純善という子がいて、何かと親交をかさね、二人は手をたずさえて良く遊んでいた。このことを知った両親は、父母のもとを離れて生活している子を不憫に思い、この上は純善を朋友として、仲良く手をむすんで修行と交遊にとめてもらおうではないかということで、岡谷家の猶子として純善を出家させたという。

天保二年、慧頓は貞照院の後住を上足天然にゆずり、慧力湛忍や純善をつれて上洛し、北野の成等庵に移ったが、ここに居ること三年、泉谷の西寿寺に移られた。在洛を機会に大いに学問を身につけたいと念願した湛忍は、東山の智積院で性相や俱舎の学を究め、余暇には頼山陽について詩文を学んだ。江戸末期から明治初期にかけての浄土宗は、宗乗はともかくとして、余乗にはこれという学匠もおらなかったで、

性相学を学ぼうとする者は、宗門外の人から教えを受けなければならなかった。残念ではあるけれども致し方ない。しかし、何はともあれ、学侶養成の機関としての学寮を京都にも建てなければ面目ないということで、篤学の人が集まってつくれたのが知恩院山内の勸学院であった。ここで彼は性相学を講ずる傍ら、内にあって弟子や道志のために宗乗を講述したが、時に湛忍の膝下に待った僧の中には、昌光律寺の深見志運や最厳律寺の円海、それに白旗弁智・賢良という、後ちに名をなした多くの人がいた。

志運は菩薩の四無量心の中でも、慈無量心の殊更ら広大なることを思念して、慈無量講を組織し、富貴の信者たちから米財をあつめ、得られた浄財を貧困の者に分ちあたえ、ねんごろに伝導教化した僧であって、この講は三河尾張の各地に設けられるとともに、利益を蒙るもの実におびただしい数にのぼったという。時に、その慈善の徳に深く感じて陰に陽に応援されたのが颯田本真尼であった。白旗弁智は知恩院の財政極度に急を告げ、山門に競売の張り紙が出されたとき、門主日野靈瑞の召しに応じわれ祖山の捨て石とならん、祖山をして昔日の姿にかえしむるため、粉骨粹身どのような困難がおしよせてきても、必らずやこれを完遂したいという悲愴な

ハ 湛 忍 和 上



決心を胸にいだき、山田弁承と共に、門主ともども草鞋ばきで全国を行脚して勧募し、祖山を貧窮のどん底から、漸く旧観に復するまでに立ちなおした僧であった。

こうした人たちと共に、湛忍のもとに育った賢良は、師湛忍の衣鉢をついで西寿寺に住したけれども、そのころ日本には魔仏毀釈の波がおしよせてきていた。時に、彼は寺と本山とを一本建てとし、末寺の財産のことごとくを本山におさめ、末寺は本山から扶持をもらって経営するようにしたらどうかという意見を出し、自から率先して、その理想を実現するため、西寿寺の財産を本山知恩院に寄進されたが、他の寺院でこれを実行するものが、殆んどなかったために、彼の考えは実現されずに終ってしまった。またヨーロッパの文化を

ながめてみると、日本の文化よりもすぐれている点がみられる。日本の文化には、もちろん良いところもあるけれども、何としてもヨーロッパの文化にはおよばない。このままでいれば、近い将来西洋文化のために、おされてしまうかもしれない。そうなったら大変だ、こちらから西洋文化の良いところは、大いに摂取し、新しい日本文化をそだてるようにつとめなくてはならない。それには西洋文化をきわめることが先決だという熱意にもえ、やがてはアメリカに渡るつもりで東京に出、駿河台のニコライ堂に入って外国語を学んだほどの、非常に進歩的な人であったが、東京滞在中赤痢にかかり、明治九年四月なくなってしまった。

こうして、子弟の養育に心魂を傾けた湛忍は、時折り故郷に帰って、親族や知人たちをあつめ、仏書を講述して信根の培養につとめたこともあれば、祖先の系統を丹念にしらべて黒谷に碑を建て追福を修し、また家訓をつくって家人にあたえたこともあった。身をつつしみ、出でては多くの人に仏の道を説き、世の人から生き仏さまとしてあがめられた学徳高い彼の名声を伝え聞いた人たちは、是非大本山清浄華院の後住にと推したけれども、「名聞利養は好むところでない」といって固辞してうけず、明治五年病のため入寂された。

明治仏教になった人びと

その二

——浄土宗学人のかがやかしき足跡——



廃仏毀釈の打撃から、いかにして仏教を復興するかとということが、明治仏教界の共通した課題であった。荒廃した寺院を再建すること、仏教興隆にはちがいないが、廃仏毀釈の影響は、それだけではすまされないものがあった。仏教の復興は、ただ単に徳川時代の旧態に復帰することではなくて、新時代に即応する仏教への革新が必要であった。そこに廃仏毀釈の歴史的意義があった。

新しき時代に生きるためには、新たな空気を吸う必要がある、その気運の一つの大きなあらわれが、仏教先覚者の海外渡航であった。

渡辺海旭師がドイツに留学したのは、荻原雲来師より八ヶ月ほど遅れてであった。師は荻原師と同じくロイマン教授に師事し、梵語やパーリ語を学び、かたわら宗教学や哲学を研究したのである。

渡辺氏は、生粋の江戸っ子であり、性格が自由活潑で、進取の気象にも富んでいた。浄土宗本校を卒業ののち、浄土宗第一教校の教師となり、傍ら浄土教報主筆として、宗門の木鐸となった。更に新仏教同志会に参加し、雑誌「新仏教」の同人として、仏教界の第一線に活躍することとなった。当時、「新仏教」の同人には、渡辺海旭師のほか、加藤玄智、高島米峰、境野黄洋等の各氏があり、旧仏教

に対して、新仏教を標榜し、従来の教権主義を排して、自由討究を主張した。これは当時の仏教界にあつては、もつとも進歩的な分子の一大団であり、その後の仏教界に及ぼす影響はすこぶる大であった。

ドイツ留学中の学績は、孔雀五経の研究、密教発達論、普賢行願讃諸本の比較研究などがあり、在独十一年の長きに亘り、実に多数の仕事をしたとげているのである。しかし、渡辺師は、ただ単に学究に甘んじているだけではなく、護法的な情熱にみちがっていた。のちになって荻原博士が、「渡辺海旭君を悼む」のなかで、つぎのように述べている。

「かつてロイマン教授が小生（荻原）の言語学上の論文を提示して門下生間に記念のサインを求めたときに、渡辺君は「善人、天職、豈、この如き区々たる小事業ならんや」と記して大笑した。これは実に渡辺君の偉大な抱負を伺うに足る」と。

渡辺師は、ドイツより帰郷後は、間もなく芝中学校長に就任し、宗教大学、東洋大学教授、大正大学理事長となり、また浄土宗執綱をかね、大正年間には、高橋博士とともに、大正新修大藏經の刊行という大事業を達成したのである。

その当時、わが国の社会事業は、なお慈善とか積善といった、いわゆる慈善事業の範囲をすこしも出ていなかった。ところが、ながくヨーロッパにあつて、その方面の知識を得て帰国した渡辺師は、この慈善事業の範囲から踏み出して、社会事業の範囲にまで進む必



要性を考慮し、これを中心にして、時代に則り、大衆に即した社会事業の調査、研究、指導にあたり、よく仏教社会事業の先駆者指導者としての任を果たすことができたのである。

椎尾升国博士は、この当時に回想しながら、とくに荻原、渡辺の両師を比較して、つぎのように述べている。

「両師は、提携同学するも、傾向必ずしも一ならず、一は慎重、他は奔放、一は専深、他は広汎、君（荻原）が書斎に精読するとき、他がビールの満を引きて世界を論ずることも少くなかった。しかも二人の留学は在独の異彩であり、日本の食料をその居に得て郷感を満たして知友も少くなかった」と。

当時の学風は、伝統的な教権に基づく護教の学の殻をやぶって、原典から仏教を研究し直し、これを西洋の仏教研究と同一水準に高め、仏教を世界文化の一環として理解しようという気風がみなぎっていた。

したがって、英語やドイツ語の研究が漸次さかんとなり、明治二十六年には、アメリカのシカゴにおいて、万国宗教大会が開催さ

れ、黒田真洞上人も、その評議員に指名され、「大衆仏教大意」が贈呈配布されたのである。

二

望月信亨師は、海外にでる機会はないが、内地的にあつて、仏教学、宗教学を専攻して、伝統的仏教学の護持につとめた。

しかし、その仏教学の研究方法は、旧来の伝統的方法とはちがって、時代の新方法をとりいれ、多分に科学的、実証的であった。明治二十年より二十年間ほどの仕事は、ほとんど表面にあらわれない基礎的な研究に費し、黒田真洞上人との共編「法然上人全集」「仏教大年表」、および仏教大辞典編纂の準備的研究などにうちこんだのである。

このような、たゆまざる努力とねばり強さが、ついに仏教大辞典七巻を完成させたのである。

この業績は世界学界における不滅の金字塔である。「略述浄土教理史」「浄土教の起源と発達」「浄土教概論」など、宗教学に関する

る著述も、みな高い価値をもつものばかりである。望月博士の学問的方法には、近代の実証主義の合理主義と、護教的教権主義との両面がそなわっていた。中世の学問研究の方法は、經文を學するといった、いわゆる學文であつたが、近世のそれは學び問うといった姿勢の學問であつて、ただ教権を信奉することではなくて、実証的に批判し、究明することである。博士にはこの両面があるときは調和し、あるときは反撥しているように思われる。

これらに、やや遅れて、椎尾弁匡、矢吹慶輝、大島泰信、笹本戒淨、藤田寛随、石塚竜學、大村桂藏などの諸師の勉學もすさまじいものがあつた。いずれも語學や西洋思想の研究から出直して、仏教學を再組織しようとしたのである。椎尾博士は、明治三十年ごろ、



いまだ二十代の若きとき、インド留学を目ざして、英語による仏教研究をはじめた。一高在學中も図書館で、主として英語ドイツ語の勉強をしたそうである。帝大在學中には、梵語やペリ語を研究されたのは、もちろんのことである。博士がよくいわれるが、当時、淨土宗高等教育を終えても、宗學本校は學校令による認定學校ではなかつたので、高等學校の入学資格を得るために、中学校の卒業證書を得なければならなかつたのである。そこで、京華中學へ入学し翌年卒業し、一高へ入学した。こういうコースをたどることは珍しいことではなく、矢吹慶輝師も、大村桂藏師も宗學本校を終えてから郁文館中學に入つてゐる。これらをもみても、その頃の宗門人が向學心に燃えて、學問のメッカを目指して一路精進したかがうかがえる。

椎尾博士は、大島泰信師らとともに、明治三十三年に小石川に興學舎という學寮を開いて、ここで學生を養成し、激励し、研究指導をした。この學寮で養われた人たちは、矢吹

大島、大村、藤田の各師のほか山口察常、田中木又、岩井龜海、大野法道の諸師がいる。興學舎が、大正、昭和の淨土宗を荷負う人材の養成について大きな役割を果たしたことにについては再認識の要があろう。

興學舎で養成された多くの人びとのなか、大村師は教育學、藤田師は史學、山口師は漢文學、岩井師は社會學など、各方面へ進み、また、笹本戒淨師は心理學、松壽泰心師は教育學へそれぞれ進んで、新しい學問を學びながら、宗學の研究と、實踐活動に挺身したのである。おもえば、廃仏毀釈の運動は、明治にはじまり、終つたものではなく、現在もつづいてゐるのである。先覺者たちが血みどろの努力を重ねて、時代の中にひたむきな護法運動を展開したことを思いながら、宗門の將來に期したいと思う。



にくしみと和



今年も残りわずかとなりましたが、この一年をふりかえりますと、世界各地で様々なでき事が生じ、新しい歴史の一ページをつくりました。人々の話題を独占したでき事、哀感をさそったでき事、共に喜びをわかち合ったでき事、人それぞれに思い出多い一年であったと思われまます。

その中で、最も人々の注目を浴びたでき事の一つとして、民族問題があげられるでしょう。内には静岡県又峡での金婚老事件、外には第十九回メキシコオリンピックの際のアメ리카黑人選手による一連の扇動的な行為があげられると思ひます。

もちろん数年越しの問題となつております南北ベトナム・南北朝鮮・中近東諸国、

近くにはチェコの動乱等もあげなければならぬのは当然なことです。しかしこれらの問題の直接の原因としては宗教・民族の異なりがその要因としてあげられるとはいつても、ほとんどがイデオロギーの対決に発しているとしております。

これらの民族問題と、金婚老事件・オリンピックで世界にアピールした黑人問題は少し趣を異にしてはいないでしょうか。このうち私が考えさせられたのは金婚老事件です。この事件の背景をみますと事件発生当初の報道はすべて勢力争ひのはての殺人・軟禁事件として取り扱われましたが、日一日と経過するにつれ、事件の背景は一変して、人種差別の問題がクロースアップされてまいりました。

この間の事情についてはすでに詳細にわたつて報道され、私共すべてが知るところで、今ここに改めて述べる必要はないと思ひます。

ただ、この事件を知った時、考えさせられたと述べましたのは、その時私の脳裏をかすめました、小学校時代の同級生Tのことを思いだしたためです。Tは小学校三年の春、横浜の市街地の学校から、私の通つた横浜郊外の片田舎の学校へ転校してまいりました。

Tの子供ながら洗練された言動は、私達田舎に育つた、どことなくのんびりとした性格の生徒にとつて驚異にさえ感じられ、引きつりこまれるのが常でした。

Tもそろそろ学校の雰囲気慣れた、五月のはじめ、誰とはなしに、このままTをいばらしておく手はない、一度こらしめようという話もち上りました。たまたま女生徒をからかっているTを多数で、入れかわりたちかわりなぐったのです。はじめ強がりをつけていたTも、ついに泣き出し、

「そんなに朝鮮人がにくいのか。何故、何故なんだ」

と、大声で叫んだのです。Tに手出しをした生徒はもちろん、その争いを見て見ぬふりをしていた女生徒も、突然のTのことばに驚き、どうしてよいのか分らず、ただわいわいとするのみでした。

その騒ぎにかけつけた先生は、誰が主謀者であるのか、きつく質すのですが、皆々ことの重大さにびっくりし、責任のなすり合いのくり返しでした。

取捨のつかぬ程の騒ぎ故、先生はその時のクラス委員をしていた私一人を職員室に呼び事の子細を質しました。はつきりした理由もなしに起ったこと故、返答にこまっている私に対し、先生のしかり方は大変な

もので、今でもよく思い出す程のものでした。が、先生はそのあとで、Tの家庭環境について話してくれたのです。

Tは第二次世界大戦の真只中、横浜に住んでいた朝鮮人の両親の長男として生れたのです。その頃の父親の仕事は順調で、何不自由なく育てられたのですが、戦後間もない頃、その事業に失敗し、戦後の混乱期に他の三国人がその私欲を貯えたのとは裏腹に、Tの父親は酒を浴びる日が続き、Tのあと次々に生れた弟妹四人を加えた一家七人は困窮の生活を余儀なくされたのでした。

Tが小学校へ入る頃には、父親は廢品回収業として再出発し、やや生計も持ちなおしたのですが、父親の酒くせは一向に止まらず、子供に当り散らす日々の連続だったのです。それでもTは希望に胸をふくらませ学校に通ったのですが、「朝鮮人の子」というだけの理由で学友からいじめられ、通学をしづらかったのです。

夫のこと、子供達のことを苦慮した母親は、このままでは一家はだめになるばかりという訳で、新転地を私の住む町へ求めて来た

のです。

淡々と、ことの子細を話してくれた先生は、

「君は寺に育った子であるし、よく分ってくれたと思う。ましてTとは同じ町内に住んでいるのだから、今後良い友達として遊んでやってくれ」

と、いわれたのです。

そのあと、職員室に呼ばれたTと私はお互いにバツが悪そうに会釈したのですが、それより以後二人の奇妙な交友が始まったのです。

私も何か心配なこと、氣にくわぬことがあったら相談してくれといわぬばかりに兄貴氣どりをふかせはしましたが、何かとTの周囲には目をくばりました。Tも私には何んでも話してくれ、小学校時代はなんとか無事にすぎました。

やがて中学校へ進んだ私達は、小学校時代の恩師の口添えと中学当局のはからいで、同じクラスで机を並べたのです。しかし、その頃からTは私の存在がかえって邪魔となりだしたのです。

その中学校は周辺の小学校四校が学区となっておりましたが、その中私の小学校が一番田舎にあり、生徒数も少なかったため、自然と私の小学校の出身者は良くいえばひかえめ、悪くいえばおどおどした性格の生徒が多かったのです。しかし、すべてがそうという訳ではありません。そのような風潮に反発した生徒もまた多くおりました。このうちの一方は進んでいろいろな活動に参加し、自分の立場を示しましたが、他方は悪の道に走りました。Tは私の心配をよそに、その後者の道を選んでしまったのです。

Tの態度は急変し、幾度となく注意する私と衝突してその都度悪くなる一方でした。ついにTは町にたむろするチンピラの一員に加わり、警察に補導されるまでになりました。

小学校時代、遊び半分ではあるが、私の寺で経典の字を拾い読みした頃の素直なTの面影はまったくかけをひそめ、同じ歳の私の手ではとてもとどかぬ所までいってしまったのです。

一方Tの家庭では、父親は依然として酒ぐせが直らず、以前にもましてひどくなり、ついには五十才そこそこで脳溢血で倒れ床にふしてしまったのです。母親は何にたよればよいかわからないままに、その頃よりさかんにになり始めた某新興宗教に擬り、家事などそのけに、その本部へ日参したのでした。

こうした家庭環境のもと、Tの悪事は少年の域を脱し、大人顔負けの行為となり、中学三年の秋にはついに少年院へ入るまでになってしまいました。

その後 Tの消息は気にはしていたものの知るよしもありませんでした。つい先日、ようやく暑さもやわらいだ九月の中頃、Tがひょっこり私をたずねてまいりました。Tのうしろには赤子を抱いた婦人が立っておりました。もちろんTの妻子であることはすぐに分りました。ひさしぶりの珍客の訪問に話しはがずみましたが、今は前非を悔い真面目に暮しているTを、私は自分のことのように喜んだのはいうまでもありません。私はこれからは絶えず連絡するようにTにいい、またTが母と話している間、奥さんをそっと呼び、T

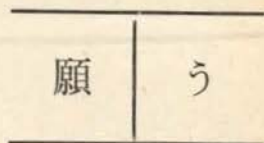
の力となり二度と悪の道に入らせぬよう内助の功よろしきをたのみました。しかしそんな心配はいりませんでした。

それはTが帰りがけ妻子と共に、幼ない頃寺への行き帰りにしたと同様に、本堂の庭前で御本尊に向って合掌している姿を見たからです。Tにとってそれまでは誠に波乱に富んだ半生であったと思います。しかし、今より後はそれまでの非を埋め合わせる時間の充分あることを、自身にいきかせているかのようで、そのTの無言の姿にはある種の自信さえ感じられ、誰も立入ることのできない、仕合せそうな親子三人の姿を見とけることができたのです。

同邦人同志でもいさごさは絶えません。ましてや異民族となると更に争いは生じるのでしよう。しかし、共にこの世に生を受けた人として、お互いに尊敬し合い、ゆずり合う気持を持ち合わせれば、どのようにな困難な問題が起ろうと、自然に解決への道は開けてくるものと思います。

自分の人生を冷静に振り返り、感受性に満ちた観察のもとに、その生きる道を深く探求するということは恐らく容易なことではあるまい。人生というこの最も深遠な問題を前にしては、だれしもが少しばかりのあとずさりをして止むを得ない。決定とか帰結とかいう言葉が、これほど不可解にして曖昧に聞える命題は他になからう。そしてこのことは、古来、人々の勇氣と温情が身も以って解決して来た唯一の事柄なのだ。

生活の矛盾や不徹底は何時の時代でも変わぬものであらうし、人間の心の在り方そのものからして、そのことは当然永劫不変の態であらう。堅固な外部世界の現実と動揺する内



清 川 宗 治

部感情の意識とにおける微妙な相剋は、原始より延々と続いて来た普通の連がりなのだ。実は、この連がりが始終執拗に変貌してしまつて、絶え間ない疑問や煩悶を生み出して来たわけなのである。人生の雑多な転変が常にこの連がりの線上にあるということは言うまでもないことであらう。

想像の果てしない領域と実世間の関わり。角田清文氏がその詩論で言うところの「詩人の唯一の使命は……」とは、正にこの間の作業（なしわざ）をうまく言い当てていると思われ。

「罪惡生死の場所である穢土の一切の有情

無情を眼ざしや信仰によって聖なるものへ連関させてやるのが詩人の使命というものだろう。もし連関しえないとすれば、それは詩人の眼ざしの曇りであり、信仰の欠除であらう」

それは即ち詩人の言うように、「下根凡夫のほくの信仰をかけて、押韻や疊句を聖なる領域へ往生させよう。どうか以て願し、成仏してくれましように」とだけ、片付けてしまつてよいものではなく、私達自身が心の奥深く想起せねばならぬものである。

確かに、「人々の勇氣と温情」がすぐ様信仰と結びついて雨りかという、決してそう

とも言えないのであるが、信仰が持つ浸透力は大いに意義のあることなのである。慈悲と救済を願うことが一つの帰依心へと導く。「な

だ一向に念仏すべし」と述べられた法然上人の称名念仏の教えは、この意味において、究極的な位置を占めるものである。南無阿弥陀仏という六字のうちに全く身をさらけ出して、ひたすら祈り念ずるという絶対的な姿勢が築かれたのである。前述したように、実際、人生を顧みて、生きる道を探究するなどということとは、如何にその身を老境に置く人であつても、至難な術だ。しかし、例えば念仏によつて人生の深い透視がなされるというようには言えぬものだろうか。

『更級日記』とは、もちろん周知の如く、平安王朝時代の女流日記文学の一つであつて、特に晩年五十余歳に至るまで四十年近くの間を振り返つて、未来する事柄を思い出し、記風に綴つた異色の作品である。文学を耽溺してその物語る世界を現実世界への理想としてあこがれて行つた作者が、成長するにつれて次々に悲嘆幻滅の運命に遭いながらも、やがては御仏の境界にその夢を育んで、美しい

安穩な後世を願うという静かなしきも言い難い心境を描いている。

その幻想的的人生観に富んだ作者の生涯の流転の結末は、

しげりゆく蓬が露にそほちつつ

人にとはれぬ音をのみぞ泣く

という寂然とした心持ちであつたが、夢破れ去つてついに得た阿弥陀仏の来迎を願う心によすがこそは、実に「よしなき」ことではなかつた。

「さすがにいまじくけ恐ろしければ、すだれのもと近くよりもえ見奉らぬば、仏、
『さは、このたびはかへりて、後に迎へに來む』とのたまふ声、わが耳一つに聞えて人はえ聞きつけずと見るに、うち驚きたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ後の頼みとしける」

誠に鮮明で美しい印象的な叙述ではないか。

後世の心の頼みとして目覚めんとする確信

が、夢の中に現れた阿弥陀仏への強い信念、感動的な筆致で吐露されている。そして、仏に「後に迎へに來む」と述べさせるところなどは、正に作者の後世安樂への激しい執着を覗かせているのである。

「年月は過ぎ変りゆけど、夢のやうなりしほを思ひ出つれば」と、寂しい孤独な老境から淡々と物語つて來たこの日記は、一人の女性の魂の告白であり、遑る瀬ないまでに痛々しい思いを秘めているものと言えよう。王朝文化の必然的デカダンスの中で、理想を追い求めんとした女性が、その日常生活の崩壊から、ついに阿弥陀仏への帰依によつて長い人生の帰路を見出したのである。

ひまもなき涙にくもる心にも

あかしと見ゆる月の影かな

私達が『更級日記』から味わうものは、一つには生きる道を学ぶべき大切な糧としてであり、また信仰に生きる人のひたむきな姿であらう。時代的背景の持つ特殊な影像が隠されているにしても、やはり宗教に向う者の根本的な心が示されているものである。

わが人生観シリーズ

著 潔

岡

心のち



で、折り折りの感想が述べられている。

その目次より内容を順次うかがえば、最初の「私の人生観」では、氏の根本的人生観の一つの切れ端が素直に流露されているし、次の「春宵十話」では、氏の数学への思い出のうちに、その生きて来た姿がまざまざと彷彿されるし、表題に採られた「こころといのち」においては、岡潔氏自らの心の独白に他ならない。そして、情緒の中心の調和こそ人間と社会を腐敗させぬものであると説き、それを更に詳説しようとした「自己と情緒」

最後に、環境、有情、自己……などを取り取りの話題を簡潔明瞭に捫め結ばれた「片雲の思想」と。以上の五つの大きなタイトルのもとに、氏の思想が面目躍如として描き出され

世界的数学者として世評高い岡潔氏は、一方では優れた随筆家としても自他ともに許される代表的知性人である。もとより数学者としての氏の輝かしい業績等に関しては殆んど言葉を知らないわけなのではあるが、その随筆家としての、いやむしろ確固たる根ざしの上に立った一宗教人としての清楚な姿にはかねてより誠に心打たれるものがあつた。氏の特異な人生観と、それに裏付けされた潔癖な鋭断とが、その卓越した才能のゆえに稀なる迫力をもって発言されているのである。

宗教に対してこれほど純粋な態度で、しかも全くその本質的無限性を明視した考えは、ほとほと敬服せざるを得ない。その意志と情惑は明澄で鋭利な華とも言える。ともかく、

質朴純清な風趣と香り高い威風とをともに兼ね備えた人なのである。確かに岡潔氏は「変人、奇人のように世間では考えられている」などという人物評がある面では当たるところもあろうが、実際には詩人にも似つかわしい真摯な「禅師の風格と重なった独特のモラリスト」と言ってもよいだろう。

今度、大和書房という出版社から「わが人生観」という叢書の中の一冊として、氏の『心といのち』という一書が世に出た。精練された簡潔な文章で、文字通り氏の人生観を漂白した気品のあるエッセイ集である。「私は純粋に日本人です」という度肝を抜かれるような強烈なせりふを冒頭に置いて、こまごまと意のよく行き届いた極めて自然な語り口

ている。

情念の深奥にある一切の幽冥混沌なるものを、きれいいさっぱりと切り落してしまつて、後に残つたものにすがすがしく洗われた魂である。そして、その魂は決しても言わぬ石ではなく、悟り切つた観点に立つて、ただ痛烈に論断する。毒こそないが、針でもありまた棘でもある。しかし根底には信仰に純化された魂の平安がある。宗教を目指す者が持つ当然の報復がある。それは「慈」と「悲」との二文字の集約によつてのみ表わされるものだ。「人たるゆえんは、人間の思いやりの感情にある」と卒直に述べている氏が、どうしてその心の暖かさを平然と隠していられようか。切れ味のよい明敏さは、そつそつとした心の在り方を微妙に捉えて、これらのエッセイを珠玉のものとしている。

人は動物だが、単なる動物ではなく、洗柿の台木に甘柿の芽をついだようなものの、つまり動物性の台木に人間性の芽をつぎ木したものといえる。

と、如何にも滋味溢れたものの言い方である。一つの事柄に対しての表現が、氏はど言いつて得た妙の感を抱かせるものはなからう。

では、宗教に対する氏の考えは如何なるところにあるだろうか。この「心といひのち」という本書の紹介がてらに、少しくその用例を挙げながら、このことについて順を追つてみよう。氏は言う。

人の人たる道をどんどん踏みこんでゆけば宗教に到達せざるを得ない。

また別のところでは次のように、

私にはすべては「そうであるか、そうでないか」の問題ではなく「それで心が安定して心の喜びも感じられるかどうか」の問題なのだと思う。宗教的方法を許容しないかぎり、それより仕方がないのではないだろうか。

岡潔氏においては、心の中にある自然をしつくりと調和のとれた態勢に導くというため

に、宗教ということが必然働くようである。「信じる」ということの究極はぜんぜん疑いがおこらない」という立場に立つて、

だから私は純理性の世界だけでも、また宗教的世界だけでもやっていけず、両方をかね備えた世界で生存し続けるのである。

という風に、観念的というよりはむしろ全く実体的な捉え方に到達するのである。

人がいちばんしなければならぬことはなにか。

その情緒をきれいにすることです。その情緒ですが、わたしは情緒を「いのち」の一片だと思つてゐるのです。

本書は極めて平易な見方、考え方のうちに、ものの真髄を確かめ得た格調高い随想集である。是非一読に値する一書であるとして、ここに自信をもつて提示出来よう。

(大和書房刊価四五〇円)



現代宗教論

(その三)

教育と家庭 — 竹 中 信 常 —

一 宗教と教育

本稿を書いている時点——十一月十三日、ついに東京大学は全学封鎖に向って学生同志で流血の争闘を見るにいたった。新聞の報ずるところでは、両派の学生の衝突に対して、学校側の教職員はなすすべもなく、傍観していたとのことである。学生ストライキはいわゆるスチューデント・パワーとして世界的流行となったが、それは決して正しい姿ではない。角棒をふるってなぐり合う学生も学生だが、これに対して呆然と見守るばかりの教師も教師である。いや、学生をこまめに狂暴化した真の原因は教育ということに対する「教師」の心構えのあやまりにあったといってもいいすぎではない。

筆者自身、二三の大学に関係をもつ教師のはしくれたが、自分ながら情けないものだとしみじみ反省させられる。現在の大学教育、そして学生、教師ともに、なにか一番肝心なものが欠けているのではないだろうか。

ここで、「教育」ということの本来の意味とあり方について、真剣に考えてみなければならないのではあるまいか。

第一にいえることは、教育とは本来「宗教」と一つのものであったことである。日本の学校のはじめは寺小屋であった。また仏教の冬宗にはそれぞれ学林という教育機関があり、これが大学のもとになった。ヨーロッパでもキリスト

教の教会や僧院がそのまま学校になっているところが多い。大体、宗教というものは教えをひろめることを主要な任務としてゐるものだが、教えをひろめるためには、どうしても、言葉や文字や理論を教えることが先に必要であり、否応なしに教育がおこなわれることになる。

ところが近世になって学校教育がおこなわれるようになる、ただ、「ものごと」を教えることだけに重点が置かれ、教わったことをどう受けとめ、これを生活全般の上にどのように反映させて行くかということが忘れられてしまったのである。だから、教わったものをうのみに覚えて、試験に合格し、卒業さえすればいいということになる。それだから、いくら東大を一番でても、悪いことをする人間が絶えないのである。

文部省では、あわてて、この頃になって道德教育だの情操教育だの、あるいは「期待される人間」だのとさわいでいるが、現在のような「つめこみ主義」の「マスプロ」教育では、本来の人間をつくることは不可能である。

なぜなら、教育というものは人と人とのふれ合い、心と心、魂と魂とのつながりにまで深まらねばならないのである。先生が授業をほり出して赤旗をかついでいたのでは、学

生がそのマネをするのは当り前である。——いまごろになって「教師と学生」との話し合いなどといっても間に合わない。それというのも、現代の社会の仕組みでは、先生も一種の職業であるから、まず喰うことが大切だという唯物的な考え方が先に立つからである。これでは血のかよった真の教育など、とてもできっこない。

寺小屋へかよう子供達は、和尚さんに鼻をかんでもらったり、お習字で墨だらけになった手や顔を拭いてもらって大きくなったのである。ただ、ものごとを教えてもらっただけではなく、行儀とかしつけとか、身なりまでも世話になって育ったのである。だから、大人になっても和尚さんには頭があがらず、ときにはお嫁さんの世話をしてもらったり、もめごとをおさめてもらったりするようになるのである。つまり、人間と人間とのあたたかいまじわりがそこにあったのである。教える方も相手がただ子供の間だけでなく、大人になっても、老人になっても、常に、互いに心にかけて合っていたのである。

それなら、なぜ、今日の学校教育にはこうした人間としてのまじわりがないのか。いろいろと理由はあるだろうが、一番大切な、根本の理由は、教える者の心がまえである。月給

のために教えるという態度である。一方社会の組織が大きくなり、構造が複雑になって一対一のじっくりした教育ができなくなったことも原因している。

いづれにしても、今日の学校教育には、しっかりした「教育目的」がない。いわば「教えっぱなし」である。それをどう生活の上に生かし、人生の上に反映させて行くべきかという、いわゆる「教育理念」が欠けているのである。

お寺の和尚さんが鼻たれ小僧を育てるように、自分も子供にかえって、一緒に机をならべ、墨だらけになって勉強する。それには教えるものが真実の人間の自覚をもたねばならない。学校にいるときだけが先生ではない、裸になっての風呂に入っているときも先生であるような、そのような先生をいま一番必要としているのである。

二 家庭と宗教

近頃は団地が流行して、新夫婦は別居して世帯をもつ。子供も一人か二人で、小じんまりとした、誰にも気がねしない家庭をつくるのが希望されている。

こうした新家庭には当然のことのように仏壇もなければ神棚もない。仏壇は親の家にあるからいらぬというのである。うが、それでは中心のない家庭、いってみればおへそのない

お腹のようである。中心のないということは「しまり」のないことで、そういう生活をつづけるとしまいには「だらしない」家庭になってしまう。

それでは、仏壇や神棚があるとどうなるか。朝起きる。顔を洗ってまず仏壇にお線香を立てて手を合せる。それから一家で食事する。一日働いて夕方帰る。夕食の膳にむかう前に、まず御先祖に御あいさつする——。そして楽しい夕餉をとる。いってみれば、一日の生活の規程がうまれる。よそから何か珍しいものを頂く。奪い合うようにしてバリバリと包みをといて、ムシャムシャとたべる。これでは野蛮人が動物と同じである。まずお仏壇に供え、カネの一つもチーンと叩いて、「珍しいものを頂きましたよ」と報告してから、一家揃って賞味する。つまりこれは、心のゆとりであり、生活のうるおいである。ガツガツと餓鬼のようにたべるのではなく、目には見えぬが尊いものに感謝する気持、これが人間の心というものである。

一口にいうと、家庭生活にしっかりとしたうるおいをもたらし、毎日の生活に規律正しいリズムを奏でるもの、これが家庭の宗教なのである。人間の家庭というものは、ただ、たべてねるところではない。そこには、体の疲れを休めると同

時に、精神の疲れをいやすほのぼのとしたやすらぎがあるはずである。そうしたやすらぎもどこから湧いてくるのか。それは目に見えぬ尊いものにむかうみずからの心の中からである。

「祖先」というと若い人々は鼻先で笑うかも知れぬ。昔に死んだ見たこともないものなど、何の関係もないというかも知れぬ。

わたしの生活はわたしがつくり上げたのだ。誰の世話にもなりはしない。——こうもいうだろう。たしかにそのとおりである。人間は結局は自分自身をたよりにして、自分自身の力で生きて行くしかない。そういう意味では、たしかに、御先祖などどうでもいいかもしれぬ。

しかし、一番たよりになる自分自身は一体どうやってこの世にあらわれたのか。人間は何から生れるのか。——いいかえれば、人間が人間から生れるのであるかぎり、親のいない人間はいない。そしてその親もまた親から生まれたのである。してみれば、いくらきんでみても、人間は人間（親）なしには存在し得ない。その切っても切れぬ親と子とが生活を共にする場所、これが家庭なのである。したがって、人間は家庭なしには生れることも、生活することもできないわけ

である。そしてその家庭は夫婦二人切りの家庭でも、その後にはそれぞれの祖先がつながっているのである。

こうした事情を理解すると、家庭と祖先と宗教とが一体不可分であることがわかるようになる。

古代ローマにしても、インドにしても、中国、日本にしても、宗教の基をなしたのは「家の祭祀」であった。家の祭祀というはずむかしく聞えるが、それは祖先を中心とした家庭生活ということである。一軒の主人が朝夕、仏壇に向って手を合せて感謝の心をあらわすことである。これを毎日毎日、規則正しくくり返して行けば、それをもととして一つのきまりが自然にでき、生活のリズムがととのってくるのである。人間だれでも子供の教育を気にしないものはない。勉強も結構。しつても大切である。しかし、そうしたもののもとになるのは、一軒の家の規律正しい生活のリズムである。両親が先になって朝夕仏壇にむかって合掌すれば、子供はいわなくともこれを見ならうようになる。そして、目には見えぬが、自分を守ってくれるものがあるという、平安の心が湧き、自信にみちた生活がひらけてくるのである。これが立派な家庭教育なのである。家庭に宗教が欠かせぬわけがここにあるのである。

後集編記



本年も残りわずかとなりましたが、如何お過でしょうか。本年もいろいろな事件が生じ、人々の共感を求め、非難を受けながら終ろうとしておりますが、皆様会員の方々に依頼されました、夫々自分なりの満足ある一年を経験されたことと思います。

次に紹介いたします文章はそんな会員の方々のうち、この一年間、いろいろ寄せられた便りの一編です。

『毎月、浄土誌を拝読させて頂きまして、我が身の修養に努力しております。七月号の編集後記に仰せの如く、私の少年時代、お盆には各家毎にお仏壇を清掃してお供え物をし

て、夕方には軒下に出て、ホーロタでオガラを焚いて御先祖並びに近親の霊をお迎えしたことを子供心に覚えております。それが段々昨今の様な世相に変わり、そのような行事も見受けられなくなりました。人の心と申しましようか、人情と申しましようか、全く変わったことに気づかせて頂きます。

私如き小輩が論ずる資格はありませんが、社会の繁栄のためとか、人格向上のための知識を広め、科学文明の発達はよろこばしいことではあります。反面、各人は個人的栄達の目的をもつて行なう行為が目にあまる思いがいたします。人口過剰・物資不足等いろいろの理由があると思いますが、将来この様になればなる程、各一人々々が真の仏教精神に基づいて正しい、清らかな生活を営ませていただかないと、やがては大山も蟻の一穴の論の如く、将来が案じられます。

庭の雑草を取っても取っても、新しい芽が出る様に、私など浄土誌のお陰で心の雑草を常に取らせていただこうと、努力させていたのですが、俗人の知恵に打ち負けて、気ままな生活になりがちです。その時は浄土誌の

御貴文を思い浮べて、心を取り直し努力しております。取るに足らない私如き者も、毎日無事安穩に過ごせることを一切に感謝させていただきます。

— 東京・江戸川・高島一正 —

『お寒くなりました。皆様御元気でいらっしやいますか。』

これまで生死についておまかせしなければと、自分に言い聞かせても、知らぬ間に心に入っておりましたが、近頃ようやく生も死も考えなくなりましたことを、浄土誌を読ましていただいているおかげでと、心から有難く思っております。』

— 青森・弘前市・今井りつ —

このような心あたたまるお便りをお寄せいただく編集部一同肝に命じて、よりよき誌面を作るように心がけている此頃です。

もうわずか、よりよき新年を迎えられよう、いただき、よりよき新年を迎えられるよう、お祈りいたし今年最後の筆おをかせていただきます。

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可
（毎月一回一日発行）
昭和四十三年十一月二十五日印刷 昭和四十三年十二月一日発行

浄土

第三十四卷

第十二号

定価金六拾円

（送料六円）

“御年始のご挨拶がわりに御用を,,

「浄土宝暦」 価 25円・送料 25円 40ページ

50部以上より単価22円 送料実費

「修養ひめくり」 価 100円・送料45円用紙33枚
タテ37cm・ヨコ13cm

会員のかたは単価85円 送料実費 (見本は 150 円お送り下さい)

発行所

法然上人讃仰会

このたび弊会編集連絡所として東京都港区芝公園19号地の1 浄土宗々務支所内に設置いたしました。事務上の手続きご連絡等は上記内法然上人讃仰会宛にお願いいたします。とりあえず十月より、事務を始めましたが、しばらくの間不備なこと多々あるとは思いますが、よろしくお願い申し上げます。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

会費一カ年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 十二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十三年十一月二十五日 印刷

昭和四十三年十二月 一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十二ノ六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二二局五九四四番

郵便東京八二二八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗々務支所内

編集室 法然上人讃仰会